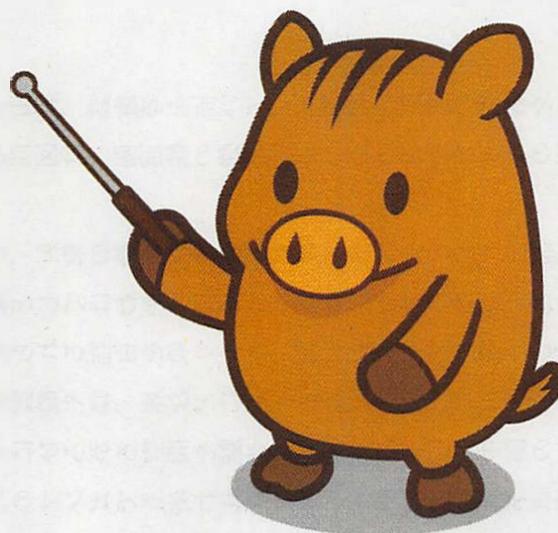


2019 年度
「文学と芸術」教育部会
外部評価報告書



2020年3月17日作成
「文学と芸術」教育部会長 濱田麻矢
hamadama@gmail.com

第1章 自己点検・評価報告書

1 教育の目的

1-1 神戸大学の教育目標

神戸大学は、「開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を発揮し人類社会に貢献するため、普遍的価値を有する「知」を創造するとともに、「人間性豊かな指導的人材」を育成することを大学の使命とし、国際的に卓越した教育を提供することを基本理念とする「神戸大学教育憲章」に示す4つの教育目標に基づいて学部・大学院教育を行っている。

教育憲章

(平成14年5月16日制定)

神戸大学は、国が設置した高等教育機関として、その固有の使命と社会的・歴史的・地域的役割を認識し、国民から負託された責務を遂行するために、ここに神戸大学教育憲章を定める。

(教育理念)

1 神戸大学は、学問の発展、人類の幸福、地球環境の保全及び世界の平和に貢献するために、学部及び大学院で国際的に卓越した教育を提供することを基本理念とする。

(教育原理)

2 神戸大学は、学生が個人的及び社会的目標の実現に向けて、その潜在能力を最大限に発揮できるよう、学生の自主性及び自律性を尊重し、個性と多様性を重視した教育を行うことを基本原理とする。

(教育目的)

3 神戸大学は、教育理念と教育原理に基づき、国際都市のもつ開放的な地域の特性を活かしながら、次のような教育を行う。

- (1) 人間性の教育：高い倫理性を有し、知性、理性及び感性の調和した教養豊かな人間の育成
- (2) 創造性の教育：伝統的な思考や方法を批判的に継承しつつ、自ら課題を設定し、創造的に解決できる能力を身につけた人間の育成
- (3) 国際性の教育：多様な価値観を尊重し、異文化に対する深い理解力を有し、コミュニケーション能力に優れた人間の育成

- ・ (4) 専門性の教育:それぞれの職業や学問分野において指導的役割を担うことのできる、深い学識と高度な専門技能を備えた人間の育成

(教育体制)

4 神戸大学は、教育理念と教育原理に基づき、その教育目的を達成するために、全学的な責任体制の下で学部及び大学院の教育を行う。

(教育評価)

5 神戸大学は、教育理念と教育原理が実現され、教育目的が達成されているかどうかを不断に点検・評価し、その改善に努める。

1-2 神戸大学の教養教育の目標

神戸大学では、全ての学生を、自ら地球的課題を発見し、その解決にリーダーシップを発揮できる人材へと育成することを学士課程の課題として、教育改革を行っている。

その一環として、まず、全学部学生を対象とする教養教育において、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力を「神戸スタンダード」として定めている。

神戸スタンダード

>複眼的に思考する能力

専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものを見方を身につける

>多様性と地球的課題を理解する能力

多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける

>協働して実践する能力

専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

この「神戸スタンダード」を全学部生が身につけるため、主として1・2年生が学修する「基礎教養科目」及び「総合教養科目」を設けている。また1・2年生だけでなく専門分野を学んだ高学年も対象とする科目として、「高度教養科目」を設け、4年間を通じて学ぶ教養教育のカリキュラムを提供している。

【4年間を通じた教養教育】

1年次	2年次	3年次	4年次
基礎教養科目		高度教養科目	
総合教養科目			
初年次セミナー	専門科目		

「文学と芸術」部会が提供する共通科目は総合教養科目に属する。

1-3 総合教養科目の学習目標

総合教養科目は、多文化に対する理解を深め、多分野にまたがる課題を考え、対話型の講義を取り入れるなどの工夫により、複眼的なものの見方、課題発見力を養成することを目的とし、以下の区分毎に学修目標を定める。

(1)多文化理解

グローバル化の進展に伴い、現代では異文化間の交流が一層深化し、同時に、異文化に対する理解不足が深刻な不和を招来しかねない状況が現出している。

この科目群では、こうした現代世界の状況を的確に把握するとともに、多文化共生のあり方を模索するのに必要な知識を獲得し、思考力を養成することを目標とする。

より具体的には、多様な時代と地域の、歴史、社会構造、伝統、宗教、芸術を扱い、これらを通じて異文化に関する知識を獲得するとともに、比較文化的観点から分析することにより、異文化との共生につながる多元的な思考力を養う。

(2)自然界の成り立ち

私達を取り巻く自然界には様々な現象が存在し、日々変化している。これら自然界の様々な事象を、私達は体験を通して、関わりを持ちつつ理解している。しかし、多くが未解明であり、今後の研究の進展に負う面も大きい。従って、自然界の様々な事象を理解し解明していくためには、私達が自然愛を持つ

て能動的に対応し、自然界を良く理解することが重要である。

この科目群では、私達の身近な現象として触れることの多い事象、例えば、科学技術と倫理の問題、現代物理学が描く世界像や身近な物理法則、自然界に見られるカタチにまつわる諸問題、ものづくりと科学技術における工学的な技術や将来展望、生命科学として身体の構造と機能の関係、生物資源と農業の今日までの関わりとその特徴、さらには昆虫や微生物との相関、などを取り上げ、私達の日常の問題として理解し、生活の中に取り込んで修得することを目標とする。

(3)グローバルイシュー

社会のグローバル化にともない、わたしたちは、国や地域の境界を越えて地球規模での解決が必要なさまざまな課題に直面している。この科目群では、これらの課題について理解を深め、その解決に指導的役割を果たす人材となるための基礎能力を身につけることを目標とする。

環境問題は、いうまでもなく地球規模の問題であり、自然科学と人文・社会科学の双方から幅広く接近する必要がある。また、人権、ジェンダー、政治や法制度、経済、ビジネスなど、わたしたちの生活に直結する問題領域も、いまや一国だけでは対処することが困難であり、地球規模の視点から取り組んでいくことが求められている。さらに、エネルギー資源・エネルギー技術や発電技術、都市安全技術などの科学技術の応用の考え方や社会における応用の実例についても、地球規模の視点から捉えることで最先端の技術動向を把握することが可能となる。

(4)ESD

この科目群では、〈地球〉を枠組みとした新しい教育運動であるESD(持続可能な開発のための教育)の本質と方法的な特徴を理解し、経済・社会システムの変更や人間のライフスタイルの変化を引き起こすために、われわれが、何を考え、何を变えなければいけないのかを考究する。個人主義的な教育観から小集団・構築主義的な教育観への変更、単一専門性幻想から共同的専門性へのパラダイムの転換など、これまでの常識をくつがえすための方法論を探究してゆく。学生・教員・学外者が、社会的活動やフィールドワークでの協働作業を通して、実践現場にふれながら、新しい動きとしてのESDに〈タッチ〉することが目標である。

(5)キャリア科目

現在、大学生には就職活動を始めるときに初めてキャリアについて考えるの

ではなく、入学時から卒業後・修了後のキャリアについて考え、深めていくことが求められている。この科目群では、実社会でのボランティアを通じて、あるいは実社会で活躍するOB/OG等社会人の講演を通じて、自己のキャリアに関して、またキャリアとは何かという問いそのものに関して考え、深めていくきっかけを掴み、将来に向けて備える能力を高めることを目標とする。

(6)神戸学

この科目群では、我々の神戸大学が立地する神戸市・兵庫県、瀬戸内海等の歴史と現状に関する理解を深める、あるいは神戸大学そのものに関する理解を深めることを通じて、これからの学生生活を過ごすことになるキャンパス、地域についての理解と関心を深め、学生生活をより有意義にするとともに地域社会と大学とのかかわりについて理解することを目標とする。

(7)データサイエンス

ICT(情報化技術)の著しい進化により、インターネット等を通じて様々な情報が瞬時にやり取りされる時代となり、それらの情報はデータとして蓄積され、ビッグデータと呼ばれている。データサイエンスは、現在、様々な分野において、これらのデータの蓄積を処理・分析し、新しい価値を生み出すための新しい学問である。数学・統計学、情報科学・情報工学におけるデータ処理・分析の技術や、データから如何に有益な情報・価値を引き出すかという点において研究・実践が進展している。

この科目群においては数学・統計学、情報科学・情報工学におけるデータの処理・分析の基礎を身に着けるとともに、各専門分野におけるデータサイエンスの応用事例、社会との関わりを学び、データサイエンスの本質、汎用性そして問題点を理解することを目標とする。それらを発展させ、自らの専門分野や、社会における様々な分野において、課題を発見し、それを様々なデータを通じて解決するための基礎的能力を涵養することも目標とする。

2 文学と芸術部会の組織・運営体制

文学と芸術部会は、国際文化学研究科・人文学研究科・人間発達環境学研究科の三部局の教員によって以下のように構成されている。

部会長（1名） 幹事（3名） 部会員 （計23名）

部会長（任期二年）は、国際教養教育院の全学会議に出席し全体の企画・調整に当たるとともに、部会内に全学共通授業科目の基本方針や学部からの要請など必要事項の周知を行う。幹事（任期二年）は各部局から1名配置され、授業の企画・調整および成績の取りまとめに当たっている。開講に関して必要な事項は、部会長と幹事が協議して決定する。

3 授業の実態

3-1 授業の概要

「文学と芸術」部会は、総合教養科目において「文学A」「文学B」「言語科学A」「芸術と文化A」「芸術と文化B」を担当している。担当教員は、部会長と幹事が部会員の専門性を考慮して調整している。

授業科目とその目標は以下の通りである。

文学A（一単位×4）

長い歴史を持つ日本の文学について、その展開の多様性を理解し、各時代の背景や各ジャンルの特質を知るとともに、すぐれた作品の味読を通して、文学作品を味わい楽しむ能力を高める。

文学B（一単位×12）

世界にはさまざまな文学的伝統が存在する。それぞれの背後にある文化的背景やそれぞれの展開についての文学史的知識を学ぶとともに、すぐれた作品の味読を通して、文学作品を味わい楽しむ能力を高める。

言語科学AおよびB（一単位×8）

さまざまな言語の言語学的特質について学ぶとともに、言語と文化の関係の多様なありようについて多面的に考察し、言語という身近な存在がもっている文化的意味について理解を深める。

芸術と文化A（一単位×10）

今日の芸術文化は、多岐・多様な様相をみせている。伝統の継承と発展、新たな創造と進化である。日本、西洋及び諸民族における芸術の展開と新しい文化形成について、音楽と造形の両分野から、理論的かつ実証的にアプローチを行う。

芸術と文化 B (一単位×12)

さまざまなジャンルの伝統芸術について、その成立・展開の歴史を学ぶとともに、現代的意義を理解する。また、すぐれた芸術に接しながら学問的方法に基づく鑑賞の仕方を学ぶことにより、ゆたかな鑑賞力を養う。

3・2 期別配当と成績の評価基準

神戸大学では、神戸大学教学規則に基づき全額に共通する授業科目を「全学共通授業科目」として定め、各教育部会に所属する教員がこれを担当している、全学共通授業科目の各分野において学部ごとに卒業要件として必要習得単位数が決められており、文学と芸術教育部会が担当する講義もこれに算入することができる。全学共通授業科目のうち「基礎教養科目」「総合教養科目」と「健康・スポーツ科学(講義)」の履修は抽選登録となっており、履修希望の講義に順位をつけ抽選への応募が必要である。科目の履修時期にはそれぞれ指定があるが、文学と芸術教育部会の担当講義である「総合教養科目」は一年次第2クォーターから二年次第4クォーターに配当されている。また、所属する学部・学科のカリキュラム上の都合から履修できる全学共通授業科目の曜日及び時限が限られることもある。

成績評価に関しては「学位授与に関する方針」に掲げる国際的に卓越した教育を保証し、「単位の実質化」を進めるため、平成24年度入学生(*)から「GPA(Grade Point Average)」を通知することになった(*学部編入学生や一部の大学院学生は含まない)。

「GPA」とは、下記「成績評価基準」(秀、優、良、可、不可)に基づいて評価した成績の単位数に、それぞれのGP(Grade Point)を掛けて合計したものを、履修登録を行った単位数の合計で割って計算した、1単位あたりのGP平均値(Average)である。

「成績評価基準」

秀、優、良、可及び不可の評価基準は、神戸大学共通細則に定めた次のとおりとする。

秀 (S) GP4.3 90点以上100点以下

学修の目標を達成し、特に優れた成果を収めている。

優 (A) GP4 80点以上90点未満

学修の目標を達成し、優れた成果を収めている。

良 (B) GP3 70 点以上 80 点未満

学修の目標を達成し、良好な成果を収めている。

可 (C) GP2 60 点以上 70 点未満

学修の目標を達成している。

不可 (F) GP0 60 点未満

学修の目標を達成していない。

3-3 授業の実施環境

授業は六甲台地区の鶴甲第 1 キャンパスで実施している。講義室は主に収容人員 200 名程度の、液晶プロジェクタと大型スクリーンが設置されている教室を使用している。スクリーンは最後尾の座席からも十分に視認できる大きさがあり、満席時の視聴覚設備としても支障ない。また、教員が円滑にセッティングできる操作卓が設置されており、パワーポイントによる講義に対応している。また、受講生が多い授業については適宜 TA を配置し、出席管理や資料配布などの効率をあげている。

3-4 授業の概要

以下、それぞれの科目についてシラバスを示す。

開講科目名	文学 A				
担当教員	濱田 麻矢		開講区分	単位数	
			第3クォーター	1.0単位	
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	木2	時間割コード	3U051
授業のテーマ					
東アジアの同時代文学における日本					
授業の到達目標					
隣国の文学は日本をどうイメージし、描いているのかを知る。					
授業の概要と計画					
様々な言語で書かれた日本に関する文学作品を一回につき一篇取り上げる。受講者は事前にBEEFにレビューをアップしておき、それに基づいて講義を行う。					
成績評価方法					
毎回のレビュー（6割）及び期末レポート（4割）					
成績評価基準					
事前に課題テキストに目を通し、的確な問題提起ができているか。 授業で講義した内容に即したレポートを作成できているか。					
履修上の注意（関連科目情報）					
特になし					
事前・事後学修					
事前の予習が必須。また、授業で言及する課題テキストをレポート執筆までに読んでおくこと。					
オフィスアワー・連絡先					
火曜二限 hanadama@gmail.com					
学生へのメッセージ					
小説を読むことが好きな人に向いている授業です					
今年度の工夫					
BEEFを使います					
教科書					
こちらで準備します					
参考書・参考資料等					
授業で提示します					
授業における使用言語					
日本語					
キーワード					
東アジア文学					

開講科目名	文学B			開講区分	単位数
担当教員	昆野 伸幸			第1クォーター	1.0単位
ナンバリングコード	J1B8100	曜日・時限	月1	時間割コード	1U052
授業のテーマ					
テーマは「古典」からみる日本の思想である。					
授業の到達目標					
私たちは『万葉集』『源氏物語』『平家物語』などを日本の古典と捉え、それらには日本人のものの感じ方の特徴が示されていると自然に判断している。本講義では、このような常識を疑い、作品に即して考えとともに、近代日本の歴史的背景について知ることで、ある作品が「古典」となる理由を学ぶことができる。					
授業の概要と計画					
授業の概要と計画は以下の通りである。					
はじめに					
1 古典とは何か――日本文学と国民国家					
Ⅰ 古代・中世					
2 『万葉集』『古今和歌集』――天皇のことばと和歌					
3 『源氏物語』――「宿世」の思想					
4 『平家物語』――運の盛衰					
Ⅱ 近代					
5 国民歌集としての『万葉集』					
6 20世紀初頭の平安時代文学観					
7 国民的叙事詩としての『平家物語』					
8 試験					
成績評価方法					
平常点4割、試験6割で評価する。					
成績評価基準					
平常点は、単なる出席ではなく、毎回提出を求めるコメントペーパーの内容によって評価する。					
2回以上の欠席で、試験を受ける資格を失うものとする。					
履修上の注意（関連科目情報）					
遅刻厳禁。					
2回以上の欠席で、試験を受ける資格を失うものとする。教育実習関連で2回以上欠席しても配慮しない。					
事前・事後学修					
講義で取り上げる文学作品の基本的事項については、各自で事前に調べておくこと。また事前にBEEFにアップしたプリントの資料を読んだうえで授業にのぞむこと。					
オフィスアワー・連絡先					
随時。事前に連絡すること (nobuyuki@port.kobe-u.ac.jp)。					
学生へのメッセージ					
毎回プリントを使用します。事前に各自BEEFからダウンロードして講義にのぞんでください。					
今年度の工夫					
とくになし。					
教科書					
教科書は使用しない。					
参考書・参考資料等					
参考文献は、初回講義時に紹介する。					

開講科目名	言語科学 A				
担当教員	鈴木 義和	開講区分	単位数		
		第3クォーター	1.0単位		
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	月2	時間割コード	3U055
授業のテーマ ことばの意味と文法					
授業の到達目標 ことばについて反省的に考える力をつける。					
授業の概要と計画 <概要> 現代日本語の助動詞 (的表現) として「べきだ」「はずだ」「なければならない」等を取り上げ、検討する。 <授業計画> 1. イントロダクション 2. 「当為的モダリティ」について 3. 「なければならない」「てもいい」など 4. 「べきだ」の意味と文法 5. 古代語「べし」の意味と文法 6. 「はずだ」の意味と文法 7. まとめの考察 8. 期末テスト					
成績評価方法 クォーター末テストの成績による。					
成績評価基準 期末テストは、授業の理解度によって評価する。					
履修上の注意 (関連科目情報) 日本語のことばを外国語科目で履修している外国語などと比較することを試みてください。					
事前・事後学修 前回の授業で話題になったことばについて、インターネットで調査したり、類義語との関係を考えるなどして、次回の授業への準備としてください。					
オフィスアワー・連絡先 木曜日 13:00~15:00、人文学研究科A棟2階A206研究室・内線5541、yssuzuki[at]kcc.zaq.no.jp					
学生へのメッセージ ことばの意味について、辞書や先行研究に書かれていることを鵜呑みにせず、自分自身で考えるようにしてください。					
今年度の工夫 できるだけ授業中に発言を求めようと思います。					
教科書 プリントを用意します。					
参考書・参考資料等 特になし。					
評価のモダリティ : 現代日本語における記述的研究 / 高梨信乃 : くろしお出版, 2010, ISBN: 9784874244838					

開講科目名	言語科学B				
担当教員	アルビン エレン			開講区分	単位数
				第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード	J1BB100	曜日・時限	水2	時間割コード	3U057
授業のテーマ					
In this class, you will learn about several topics in the academic field of "linguistics" - the scientific study of language. The specific focus for this quarter is: "How language is structured, Part 2 (Sentences and meaning)".					
授業の到達目標					
(1) By the end of this class, you should be familiar with the idea of treating language as an object of scientific study, based on testing hypotheses in the same way as biology or chemistry. (2) A second goal for this class is for you to increase your awareness of language, including (a) how you speak your native language, (b) your process of learning a second language, and (c) how language is used every day around you (by your friends/family, in the city you live in, etc.)					
授業の概要と計画					
[Class 1] Syllabus; Languages and linguistics [Class 2-4] The structure and function of phrases and sentences: Syntax [Class 5-6] The study of meaning: Semantics [Class 7-8] Language universals and language typology (Some details of this plan might change.)					
成績評価方法					
a) Attendance and participation: 50% b) Quizzes/homework: 50%					
成績評価基準					
a) Attendance will be taken every class, and you will be expected to actively participate (for example, by asking/answering questions, or by having discussions during group-work activities). b) Almost every week during the class, there will be some kind of homework or quiz. Extra details about both of these things will be given during the first day of class.					
履修上の注意 (関連科目情報)					
(1) There are no special requirements for you to register in this class. It is expected that this is your first time learning about linguistics, so students from any background are welcome. (2) You do NOT need to bring a computer to class each day.					
事前・事後学修					
One special feature of this class is the fact that, in general, there will be no textbook reading homework. Instead, to prepare for class every day, you will need to watch a YouTube video about linguistics.					
オフィスアワー・連絡先					
The instructor does not have office hours at a fixed time each week. To make an appointment, please send an e-mail to albin (AT) people.kobe-u.ac.jp.					
学生へのメッセージ					
(1) If you are interested in language, this class should be interesting and enjoyable! And please do not be anxious about your English. In general, problems with pronunciation and grammar will not affect your grade. (2) This class is based on an "active learning" format, so every class, you will need to participate in group work. And please do not be afraid to ask questions!					
今年度の工夫					
N/A (This is the first time this instructor has taught the class.)					
教科書					
In class, charts, graphs, and activities from the following books will be used. You do NOT need to purchase either book. Finegan, E. (2014). Language: Its Structure and Use (7th ed.). Boston, Massachusetts: Cengage Learning. Finegan, E., & Frommer, P. R. (2014). Looking at Languages: A Workbook in Elementary Linguistics [6th ed]. Boston, Massachusetts: Cengage Learning.					

開講科目名	芸術と文化A				
担当教員	勅使河原 君江		開講区分	単位数	
			第1クォーター	1.0単位	
ナンバリングコード	J1B8100	曜日・時限	月1	時間割コード	1U056
授業のテーマ					
西洋美術史の基本を学び、主体的、能動的な美術鑑賞力を身につける					
授業の到達目標					
美術史の知識を学ぶとともに、美術鑑賞スキルを身につけ総合的な美術鑑賞力を養う					
授業の概要と計画					
1. オリエンテーション 美術史入門 2. 美術史1 (西洋美術史概要、西洋美術史起源) 3. 美術史2 (中世 ロマネスク) 4. 美術史3 (中世 ゴシック) 5. 美術史4 (初期ルネッサンス) 6. 美術史5 (盛期ルネッサンス) 7. 美術史6 (近代 印象派) 8. 美術史の理解と美術鑑賞についてのまとめ					
成績評価方法					
出席・テスト・レポートの総合で評価します。					
成績評価基準					
講義内容が理解されているか。 美術作品を主体的に鑑賞し、考察が行われているか。 作品理解について論理的に取り組んでいるか。					
履修上の注意 (関連科目情報)					
授業時間内に対話型美術鑑賞に取り組みますので、積極的な美術鑑賞態度で臨んでいただけることを希望します。 神戸近郊の美術館で開催されている展覧会の鑑賞レポート作成を課する予定です。					
事前・事後学修					
事前に授業内容に該当する美術内容に関する資料や映像をみて予備知識を得ておくことを望みます。また事後学修として、学んだ美術分野の展覧会を訪問する等、実物の作品に触れて美術鑑賞力を伸ばして下さい。					
オフィスアワー・連絡先					
toshi@kobe-u.ac.jp 研究室：人間発達環境学研究科 A棟A418					
学生へのメッセージ					
美術を学び、能動的な美術鑑賞方法を体得することで、広く多様な視野を獲得できるように積極的な受講を望みます。					
今年度の工夫					
美術入門の授業として、美術史を学びつつ能動的に美術鑑賞ができる力がつくよう、実践的に学ぶカリキュラムとした。					
教科書					
西洋美術史 / 高階秀爾：美術出版社，2002年，ISBN:9784568400649					
参考書・参考資料等					
西洋美術101鑑賞ガイドブック / 神林恒道：三元社，2008，ISBN:9784883032297					

開講科目名	芸術と文化B				
担当教員	寺内 直子	開講区分		単位数	
		第3クォーター		1.0単位	
ナンバリングコード	U188100	曜日・時限	月2	時間割コード	3U060
授業のテーマ					
日本の暦と祭					
授業の到達目標					
日本の文化の根底にある暦や季節感を理解し、季節ごとに行われる祭りや芸能について理解を深める。					
授業の概要と計画					
1 日本の暦 2 春の行事 3 夏の行事 4 秋の行事 5 冬の行事 6 芸能の諸相1：神楽、田楽、風流 7 芸能の諸相2：祝福芸、舞台芸 8 筆記試験					
成績評価方法					
平常点 20%、期末筆記試験 80%					
成績評価基準					
毎回授業の最後にコメントペーパーを提出してもらい、授業への集中度や理解度を測る。期末試験によって、講義内容全般の理解度を問う。					
履修上の注意（関連科目情報）					
毎回、PCによるプレゼンテーションや視聴覚資料の提示を行う。 必ずノートを持参し、講義内容のポイントを的確に書き取れるようにすること。（配布資料は配らない）					
事前・事後学修					
講義内容に関するノートをよく整理し、興味を持った事項は、インターネットや視聴覚資料、文献などを参照して、自分で理解を深める努力をすること。					
オフィスアワー・連絡先					
事前予約 naokotk [at] kobe-u. ac. jp					
学生へのメッセージ					
人の話を聞いて要点を書き取っていく能力は、社会に出て大いに役立つので、今からその習慣をつけるよう、努力すること。					
今年度の工夫					
視聴覚資料を多用する。					
教科書					
特定の教科書は使用しないが、参考書は授業中に紹介する。					
参考書・参考資料等					
参考書は多岐にわたるが、たとえば、下記のようなものがある。 大系日本歴史と芸能：音と映像と文字による / 網野魯彦他：平凡社，1990-1992，ISBN： 日本の傳統芸能 / 本田安次著作集 / 本田安次：錦正社，1993，ISBN：					

4 「外部評価の評価項目モデル」に沿った自己点検・評価

A-①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか。

文学と芸術部会は、国際文化学研究科、人文学研究科、人間発達環境学研究科に主配置あるいは配置されている教員で構成されている。総合教養科目「文学A、文学B」「言語科学A、言語科学B」「芸術と文化A、芸術と文化B」の中から、それぞれの教員の専門性に合致した科目を担当している。各部局から一人ずつ、計三名の幹事を選出し、これらの幹事が部会長と協議して担当教員の手配やカリキュラムの調整を行なっている。このシステムは安定して運用されており、適切に整備され、機能している。

B-①自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか。

クォーター制によって生じたメリットとデメリットについて部会内で意見交換を行った。現在もなお、クォーター制とセメスター制のメリットを取り入れた学期制を実現すべく、調整を続けている。

B-②学生を含む関係者からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行なっているか。

学期末には教務情報システム上で「振り返りアンケート」が行われ、担当教員自身もその結果にコメントができるシステムになっている。

B-③授業の内容及び方法の改善を図るためのFDを組織的に実施しているか

「文学と芸術」部会では2019年にピアレビューを実施し、さらにピアレビュー意見交換検討会を実施して授業の改善を図った。

また、国際教養教育院主催のFDに積極的に参加するよう部会員に促している。

B-④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか

希望教員にはティーチングアシスタント及びスチューデントアシスタントが配置され、それぞれの職分に応じた業務に当たっているが、いかんせん需要に供給が追いついていない傾向がある。両者とも、事前に担当教員によるオリエ

ンテーションが行われるよう要請されている。

C-①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか

総合教養科目の第一の区分「多文化理解」は「多様な時代と地域の、歴史、社会構造、伝統、宗教、芸術を扱い、これらを通じて異文化に関する知識を獲得するとともに、比較文化的観点から分析することにより、異文化との共生につながる多角的な思考力を養う」ことを目標としている。先に掲げた各シラバスに書かれた授業群は文学、芸術、言語など人文学の諸課題を扱いながら伝統と近代、日本と世界を繋ぐ多文化理解を促すものであり、目標は合致していると考えられる。

C-②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか

共通目標、あるいは国際教養教育委員会での決定事項などは部会長から幹事を通じて各担当教員に伝えられる。特定の学部からの要請は現在までのところ受け取ったことはない。

C-③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか

授業内容は引用したシラバスの通りだが、目標に沿って授業が組み立てられ、実践されている。

C-④単位の実質化への配慮がなされているか

シラバスに成績評価基準が明記されるようになり、それをもとに評価が行われている。出席しただけで評価されることがないように申し合わせ、授業でのパフォーマンスや小テスト、レポート、試験などによって単位の実質化が進められている。

C-⑤教育の目標に垂らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか

「文学と芸術」部会は授業科目の性質上、講義科目が中心となる。しかしながら、教務情報システムを活用するなどして、大人数授業でもこまめにレスポンスさせる授業が可能となったため、双方向的な指導の試みがひろがっている。

C-⑥シラバスに必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修

上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が描く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか

シラバスの必須項目指定が補強されたこともあり、全ての項目が基本的に記入されている。しかし「概要」についてまだ抽象的な表現があったり、「授業中に指示」などの文言が残っているのには改善の余地がある。

C-⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか

シラバスをわかりやすく描くことで履修指導を補っている。

C-⑧学生のニーズに応え得る学修相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか

各シラバスにオフィスアワーを明記し、学生が相談しやすい環境を作っている。また、教務情報システムのメッセージ機能を使った学修相談も増えている。

C-⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか

成績評価については、秀を10パーセント未満に、秀と優を合わせた評価をほぼ4割以内に収めるよう各教員に申し合わせ、数年をかけて秀についてはほぼ目標が達成された。優と秀の割合についても理想に近づいている。

この基準が大幅に破られるのは、臨時で雇用した非常勤講師の担当科目が多い。非常勤雇用の際に、成績評価についてしっかり説明する必要がある。

C-⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか

令和元年の第1Q、第2Q（前期 Semester）に実施した振り返りアンケートによると、文学と芸術部会の科目について「授業の内容をよく理解できた」「どちらかといえば理解できた」という回答を合わせると67.3パーセント、「シラバスの到達目標を十分に達成できた」「ある程度達成できた」との回答を合わせると47.2パーセント、「授業が有益であった」「どちらかといえば有益であった」という回答は75.3パーセントという結果であった。多くの学生が有益な授業を理解できたと考えているが、シラバスの掲げた目標についてはやや自信が持てない様子が見られる。

5：1 巡目の外部評価結果及びそこで明らかとなった当該部会の課題等

5-1 一巡目の評価シートは以下の通りである。

教育部会自己点検・評価シート（様式1）

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：文学と芸術

部長名：鈴木幹雄

作成者名：鈴木幹雄

概要（2000字）

1. 開講科目

平成26年度の『文学と芸術』教育部会は、前期に「日本の文学」4コマ、「世界の文学」1コマ、「言語と文化」1コマ、「伝統芸術」3コマ、「芸術と文化」3コマ、合計12コマを担当している。また、同年度後期には、「日本の文学」3コマ、「世界の文学」1コマ、「言語と文化」3コマ、「伝統芸術」3コマ、「芸術と文化」2コマ、合計12コマを担当している。関係研究科は、国際文化学研究科6名（前期・後期各1コマ担当）、人文学研究科8名（半期各1コマ担当）、人間発達環境学研究科4名（半期各1コマ担当）の3研究科で、総計18名が前期・後期合計24コマを担当している。

2. 授業内容

各教員が各自の問題意識と専門分野を踏まえ、学生たちの幅広い関心に応えつつ、現代人にふさわしい文学や芸術の教養・知識を深めることを目的とした多様なメニューを提供しようと試みている。以下、14名の教員から授業自己評価回答のあったもの*の中から若干の代表的事例、約2件を取り上げ、そのメニューを紹介する。（*：回収率：14/18、78%、メニューは一部短縮）

(1) 日本の文学：

①「近代文学と天皇・戦争」をテーマに、近代日本における国文学者・作家・作品のありようを検討することを通じて、20世紀の日本が経験した歴史と作家・作品との密接な関係について講義した。

②万葉集の歌・人物について講義した。万葉集について一通りの知識を得られるよう、講義内容を構成した。高等学校までの教材で扱われている事柄を重点的に取り上げたほか、方言や字余りなど、周辺的な事柄も扱うよう配慮した。

(2) 世界の文学：

①以下の各テーマに沿って、まず概説を行なった後、作品の一部を原文と日本語訳で読み、中国古典文学の特質について考える。1. 中国の古典文学、2. 詩経と楚辞、3. 口承の文学、4. 民間の風習と文学、6. 古典詩のきまり、7. 詩の技法、8. 小説の発生と展開、9. 文言の文学と白話の文学。

(3) 言語と文化：

①受講者に言語のバラエティの学問的意義を学ばせることによって、言語と人間についての理解を深めることを目的とする。受講者は講義を通して、自身の言語表現を内省する力、異文化接触における他言語表現を理解する力を身につけることができる。

②人間言語の普遍性について文法の観点から考える。特に、言語学の生成文法の基本的な考え方を導入しながら、日本語や英語の文法における共通点・相違点を観察し、それが人間言語の普遍性とどのように関連するかを考える。

(4) 伝統芸術：

①日本の伝統文化を音楽、芸能の観点から紹介し、現代社会、国際化社会における日本文化の意義について考えさせる。

②世界映画史を解説するとともに、各時代の特徴的な映画のスタイルを具体的な映像を交えて解説する。

(5) 芸術と文化：

①クラシックの中の声楽とくに歌曲の歴史をたどりながら社会とどのように関わりながら変化してきたのかを、音楽鑑賞を通して、理解だけではなく、自分の体で感じる事が目的の一つである。

②19世紀の芸術から20世紀の芸術的視点<コンポジットジョン>へ至る地殻変動を、造形芸術上のダイナミズムとして断片的に知ると同時に理解を深め、ヨーロッパにおける近代芸術成立事情の基本線を理解出来るようになることを目指した。

3. 教育方法の工夫

(1) 以上のようなアンケート回答を得た。

①毎回テキストと関連資料・レジュメを配布し、学部1年生にも解りやすく解説する努力を行った。

②授業内容に関連した視聴覚資料を積極的に活用し、理解を深める努力を行った。

③授業に関連して情報機器を積極的に活用し、理解を深める努力を行った。

④授業中に書かせるレポート、試験などによって、知識と理解を身につけられるよう努力を行った。

⑤適宜アンケートや学生からのコメントペーパーを活用するなどして、学生の理解度を把握し、同時に学生の理解を深めるべく授業展開を修正実現する努力を行った。

4. 展望・課題

①教員アンケートからは、授業においては適宜学生の知識と理解を深めるべく、改善・努力をしている実態が浮かび上がってきている。学生アンケートからも、基本的に、それが裏付けられている。

②ただ他方では、従来文学や芸術は、若者の知的・文化的好奇心の対象であり得てきたが、文学的・芸術的領域においてその知的好奇心に陰りが見えるようになってきた。本学本教育部会の歴代会長による年間自己評価においても、近年この点に対する懸念が指摘されている。

③本年度、本教育部会では外部評価委員会が開かれたが、同委員会でも、当該共通教育教科に対する受講学生のモチベーション刺激策が論議され、「グローカリゼーションの現代的要請の活用」、「導入授業の水準を下げることによる、受講学生の文学・芸術的モチベーションの活性化」等、外部評価委員による試行的提言がなされた。

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮している。この部会では、大きくわけて文学、言語、芸術に関する教養原論を、三つの文科系の部局の教員が講義しているが、いわゆる、「古典」だけでなく、現代の新しい表現、社会と関連した今日的な諸問題を積極的に取り上

げて、学生の関心、興味に対応する内容を提供している。

根拠資料
シラバス、授業中に提示したスライド、配布したプリント、レジュメ。オーディオ・映像資料、学生のコメントペーパー

5-2【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）
この部会では教養原論という講義形式の授業形態を展開しているが、特に芸術系の授業では、ことばによる説明、理論の解説に、ビジュアル資料、音響・映像資料の実例を組み合わせている。このことは実物を提示することによって対象に対する理解を深める効果があると同時に、単調な講義の流れに変化をつける、という効果も持っている。

根拠資料
シラバス、授業中に提示したスライド、配布したプリント、レジュメ、オーディオ、映像資料。

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100字以上）
学期末の試験によって講義内容の理解度を測ると同時に、レポートの提出によって、講義内容に関連した問題意識がどのくらい習得されているかを測っている。また、授業によっては毎回コメントペーパーを提出させたり、小テストを実施して、理解度とともに、学生の興味の動向を知る手助けとしている。

根拠資料
シラバス（課題提示）、レポート課題、小テスト等

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

観点に係る状況（50字以上）
シラバスは、授業の目標の明示、内容の概要、スケジュールの提示など、全体の内容と構成がわかるよう工夫している。

根拠資料
シラバス、授業中に提示したスライド、配布したプリント、レジュメ、オーディオ、映像資料

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100字以上） 本学の特性からして、「基礎学力不足の学生」はあまり見られない。ただ、文学、芸術へのモチベーションの低下は大きな問題である。このため、学生の関心を喚起するために、現代生活において身の回りにあるもの、日常的な話題等を適宜取り入れ、それを抽象的な理論、普遍的なテーマへと導くように工夫している。
根拠資料 授業担当教員自己評価書、学生授業評価、シラバス、授業中に提示したスライド、オーディオ、映像資料、試験、レポートなど

5-3【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上） 成績評価については、シラバスに明記するとともに、授業中に複数回説明し、注意を喚起している。出席については、出席票に名前を書かせるだけでなく、コメントを書かせ、授業をきちんと聞いているか、理解しているかなどのチェックを行っている。
根拠資料 シラバスによる明示、口頭での説明、プリント、レジュメによる学習到達目標の提示、レポート、筆記試験

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100字以上） 成績評価等の客観性、厳格性を確保するために、最終成績評価については、出席状況、レポートと試験による理解度のチェックなどを総合的に勘案して成績判断を行うよう努めている。筆記試験は全体の平均点が適正な範囲に来るように設問を工夫している。
根拠資料 試験結果、試験の平均点、提出されたレポート、出席票、コメントペーパー

基準6 学習成果

6-1【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>学生の意見は学生自身の授業内容への興味、授業への取り組み態度によって大きく異なる。一般的に、興味を持って熱心に聴講する学生からの授業内容に対する反応は良好であるが、一方で教室の設備の不備（たとえばプロジェクターが暗くてよく見えないなど）や、スライドの提示の時間が短いなど、授業の実質的な進行に関する不満は毎年一定程度ある。こうした実践上の問題については、学生の意見を参考に改善するように努めている。</p>
<p>根拠資料</p> <p>学生授業評価、授業担当教員自己評価書、コメントペーパー等</p>

基準7 施設・設備及び学生支援

7-1【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

<p>観点に係る状況（50字以上）</p> <p>施設上の課題はあるが、改善されつつある。課題点としては、無線LANの転送速度の遅さ（授業中に何度もフリーズする）。照明スイッチが映像機器キャビネットのそばに無い（教室の反対側にある）など。図書館の図書（視聴覚資料も含め）などのコンテンツは年々追加され、よりよい環境となっている。学内のネット環境も年々向上している。</p>
<p>根拠資料</p> <p>鶴甲第一キャンパスにおける図書館の整備、各教室の情報機器の整備等</p>

7-2【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>適切に実施されている。授業開始時に、シラバス、口頭で授業の目標、内容、成績評価、受講上の注意などについて説明している。また、授業中には各種の参考書、参考資料など、学習に役立つ情報を提供し、学生がみずから考えるための材料を提供している。</p>
<p>根拠資料</p> <p>授業導入時のガイダンス、シラバス、授業時に適宜なされる授業のオリエンテーリング、要約的レジュメ、オフィス・アワーの明示・活用</p>

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。
また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>授業中、授業後に質問を受けているほか、オフィス・アワーを利用した、質問、相談も受け付けている。また、一部の教員は、日本語を母語としない留学生のために、スライドに英語字幕をつけたり、筆記試験、シラバスの英語版を作成している。</p>
<p>根拠資料</p> <p>オフィス・アワーの明示・活用、留学生用の英文ガイド、英語版スライド、英語版試験問題等の活用</p>

5-2 課題等に対する当該部会の取組・改善への自己点検・評価

5-1 にある通り、本部会での主な課題は学生との双方向のやりとりと、施設面の改善にあった。一巡目評価時との違いの一つは、施設面での大幅な改善であろう。

現在の教室では PPT での視認性があがり、最後列でも大型モニタをくっきりと見ることができる。AV ラックも充実し、教員が手元で用意に操作できるようになった。

さらにソフト面では、教務情報システム (BEEF) の充実によって、学生に課題を配布したり課題を報告させたり、質問を受け付けたりという作業が格段に便利になった。オフィスアワーに頼らずとも、履修・学修指導が可能になった点は大きい。

教育システムの最大の変化はクォーター制への移行である。従来のセメスタ一制から期間が半分になったことで、多様な科目の受講が可能になった一方、授業内容が細切れになり、系統的な学びが難しくなったことは否めない。どのようにこの問題を克服するかが今後の大きな課題となるだろう。

第2章 外部評価委員会実施議事録

実施日時：2020年1月23日 午後三時

場所：鶴甲第一キャンパス N402

外部評価実施委員

唐澤靖彦 立命館大学文学部教授

藤野真子 関西学院大学商学部教授

議事進行

濱田麻矢 「文学と芸術」教育部会長

同席者

大月一弘 国際教養教育院長

坂本千代 国際教養教育院評価・FD 専門委員会委員長

第1章と同じ資料をPPTにし、濱田部会長から口頭で現況について説明。

質疑応答は以下の通り。

Q1:文学と芸術部会の組織・運営体制についてだが、担当する三つの研究科のバックグラウンド（歴史的変遷）はどのようなものか。どのような教員が所属し、この部会の運営・授業に関わっているのか。

A1:人間発達環境学研究科の下部にあった学部の前身は発達科学部で1992年に教育学部を改組してできた学部であり、国際文化学研究科の下部にある学部の前身は国際文化学部、92年までは教養学部として全学の教養教育を担ってきた。発達科学部と国際文化学部は2017年度に再編統合され、国際人間科学部となっている。人文学研究科の下部にあるのは文学部であり、初等教育、グローバル文化、文学、および芸術をディシプリンとする教員が主となる。

Q2:「文学」「言語科学」「芸術と文化」それぞれの科目がA、Bの振り分けられているのは、どのような基準に基づくのか。

A2:元来、Aは国外、Bは日本を対象とする授業科目であったはずだが、ここ数年の改編により、必ずしもその区別の通りにコースが作られているわけではなくなっている。

Q3:その原則に従えば「文学A」は海外文学を講義するとのことだが、実際には英米文学と中国文学しか講じられていないのはなぜか。

A3:独文、仏文を専門とする教員もいるが、独仏語の教員はみな第二外国語部会に所属しており、文学の全学共通授業までは手が回らないのが現状である。

Q4:「芸術と文化」ではどのような授業が行われているのか、実技なども含まれるのか。

Q4:初等教育を専攻する学生には実技などが必要だが、実技は基本的に専門教育で行われている。ただ、特に芸術の授業では、教員が実演してみせることもある。

Q5:「振り返りアンケート」とは、いわゆる授業評価に相当するものなのか。どのようなスタイル（選択 or 記述）で行われているのか。

Q5:授業評価の一部となるものだが、学生の自己評価も行ってもらおう方式。教務システムに各々ログインし、主に選択方式で授業について振り返らせたあと、自由記述もしてもらう。無記名だが、ログインというハードルがあるので、あまり野放図な書き込みは見られない。

Q6:講義科目の人数は max・min どれくらいか。

Q6:最大受講者数は 200 人までと制限されているが、本部会については最大で 100 人強、最小人数は約 30 人である。

Q7:成績評価について、非常勤講師への通知や説明は誰が、どのように行うのか。

A7:事務的な連絡は学務課だが、評価についての指針や基準についての詳細は、部会長から三部局の幹事に通知をし、幹事からそれぞれの部局で雇用した非常勤講師に連絡してもらっている。

Q8:クォーター制導入により生じた問題点は何かあるか。

A8:良い悪いではなく、授業の質が根本的に変わってしまった。以前 15 回で組み立てた授業ではなく、7.5 回で完結した内容を考えねばならない。講義の内容も、当然学生の理解度もそれにわせて薄いものになった。ただ、学生の履修できる科目の種類はその分増えることになるので、薄いが多様な教養を身につける機会があるとも言える。成績判定など、教務に関わる業務はたいへん煩雑になった。

Q9:同一担当者でもクォーター毎に異なる授業を実施するのか。

A9:基本的にクォーターごとに同じ授業を繰り返すことになる。学生は同一科目を二度履修することはできない。

Q10:「BEEF」とは何を略したものか、当該システムはほとんどの教員が積極利用しているのか。

A10: Basic Environment for Educational Frontier の略、もちろん神戸ビーフとの掛言葉である。利用が推奨されているが、積極的な利用はまだ二割程度にとどまっており、これからの活用が期待される。

外部評価委員報告書

令和2年2月4日

国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構国際教養教育院
「文学と芸術」部会 御中

立命館大学文学部
教授 唐澤靖彦

外部評価委員として国立大学法人神戸大学大学教育推進機構国際教養教育院「文学と芸術」部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

意見

○ 特に優れている点

状況に応じて授業運営の柔軟な対応が利く、多様な科目を学生に提供できる、といったクォーター制の利点が活かされている。クォーター制となって四年が経ち、学生の学年が一巡したことで、この制度の運営が可能であることがよく示された。部会内での意思疎通も円滑であり、クォーター制のもとでの教養科目のあり方について検証する努力がなされている。

○ 特に改善を要する点

「芸術と文化」A及びBの授業内容の概要に書かれた分野が、必ずしも現状と一致していないので、検討を要する。また、1-2-3の冒頭で示された総合教養科目の学習目標（多文化、他分野、対話型、複眼的、課題発見）が、ある科目でどのようにカバーされているか、シラバスに反映されるとよい。自己検証もしやすくなる。

○ 全体的講評

クォーター制の実行可能性を示した実例であり、この点は高く評価できる。しかし、神戸大学のような、小規模かつ学生のクォリティが一定程度保証されている大学だからこそ、この制度が運営可能であるのも事実である。そういう意味で、大学教育（教養教育を含む）のあり方の理想が追求されている点は高く評価できると同時に、この「神戸大モデル」が他大学でどれだけ応用可能なのか、今後の検証の対象となる。

クォーター制は授業運営がどうしてもスピーディーになるため、学生にきめ細かく対応する必要が生じると思われるが、この点もBEEFの構築等で対応できているのが評価できる。これもまた、上記の神戸大ならではの利点が可能にしている。今後は、成績評価期間の余裕に困難が生じる等の、クォーター制のデメリット面をどのように解消していくかが問われる。

以上

外部評価委員報告書

令和 2 年 2 月 1 日

国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構国際教養教育院
「文学と芸術」部会 御中

関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科
教授 藤野 真子

外部評価委員として国立大学法人神戸大学大学教育推進機構国際教養教育院「文化と芸術」部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

意見

○ 特に優れている点

- ・講義科目が中心となることを考慮し、教務情報システム上で履修者を対象に「振り返りアンケート」を実施、さらに担当教員もコメントを付すようにするなど、教授者・受講者双方のフィードバックに努めている点は特に評価したい。
- ・ピアレビューを通じ、担当者間で意見交換することにより、授業改善に活かしている点も評価したい。

○ 特に改善を要する点

- ・多様性を重視し、多文化理解を追究するのであれば、開講科目で扱う地域がより広範であることが望ましい。特に、文学 A、B においては、東アジア圏以外も扱うことで、履修者の選択行動も多様化し、より多方面での知見を得られるものとする。

○ 全体的講評

神戸という、もとより多文化共生が行われてきた地に立脚し、その特性を最大限に活かす科目設定を行うにあたって、本部会に期待される役割は学内でも大きなものであろうと推察される。本部会による自己点検を拝見するに、講義内容が多岐にわたるのみならず、教務システムを利用した教授者と受講者との対話および評価基準の設定など、運営方針もよく考えられているように思われた。

非常勤講師による成績評価、クォーター制への対応などの問題点が若干指摘されていたが、いずれも膨大な時間や労力をかけずとも解決可能な項目であり、全体的におおむね良好な科目提供が行われていると言ってよい。

以上